

本校は「未来へつなぐ教科・領域の授業づくり」という研究主題のもと、研究を進めて4年目に入ります。未来を生きる子供たちが各教科・領域の学習で習得すべき見方・考え方とは何であるのか、そのために必要な学びのプロセスとはどのようなものであるかを昨年度までの研究で明確にし、それぞれの教科・領域で研究のテーマを設定して、新たな実践につなげるための研究をしていきます。

令和2年度 研究教員紹介

研究教科・領域	研究教員	共同研究者
国語	竹内 由美	小笠原 拓
国語（書写）	三谷 早苗	住川 英明
社会	尾崎 隆宏 田中 雅子	小山 富見男
算数	大杉 晃範 前田 明彦	矢部 敏昭 溝口 達也
理科	磯江 孝	泉 直志
生活	西尾 牧子 山本 紗弓	福山 寛志
音楽	谷口 峻音	鈴木 慎一朗
図工	堀 愛	武田 信吾
道徳	乾 道夫	竹内 善一
外国語	横山 由佳	足立 和美
プログラミング教育	完田 八郎	小林 祐紀 (茨城大学教育学部)

研究の実際

本校では、基本的に毎週月曜日を「研究日」として、教職員がそれぞれ専門の教科・領域についてテーマを設定し研究を行っていきます。大学附属小学校という特色を生かして、鳥取大学の先生を中心に共同研究者という形で、協力して各教科・領域で専門的な研究を進めています。またテーマ別の研究の他にも、子供たちの指導に必要な研修を適宜行って指導力を高めています。

主に以下に挙げるような内容を計画的に

進めています。

- ・校内授業研究会
- ・共同研究者との研究の打ち合わせ
- ・研究3グループでの話合い
- ・個人研究
- ・職員全体研修

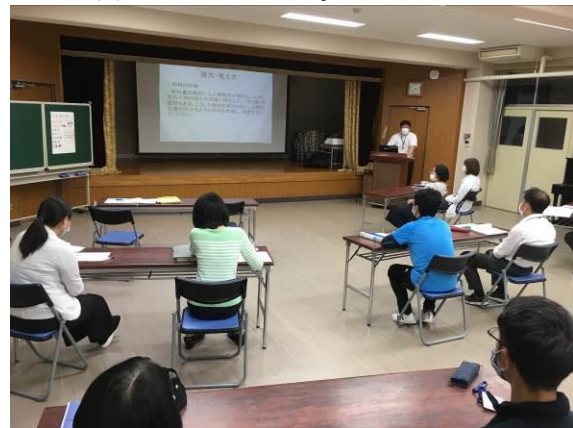
以下に、活動の様子を紹介します。

① 英語活動・外国語活動・外国語の職員研修（4月9日（木））

今年度、低学年・中学年・高学年で取り組む英語学習の進め方について研修を行いました。昨年度までの外国語の研究の成果をふまえた授業の進め方や教材の活用方法などを中心に、全教職員が担当教諭から指導法を研修しました。

② 年度初め研究プレゼンテーション（5月14日（木）・5月18日（月））

今年度の研究テーマや研究の計画について教職員一人一人がプレゼンテーションしました。目的・方法・検証について各教科・領域で1年間取り組んでいく研究の内容を聞き合い助言し合うことで、研究の質をさらに高めていきました。



研究発表大会1次案内について

今のところ、本年度の**研究発表大会**は、**令和2年10月31日（土）**

に開催する予定にしています。感染症等の状況により変更になる場合があります。なお、1次案内（PDF）を本ホームページにアップしますので、ご覧ください。

（研究主任 完田 八郎）

校内授業研究会

(プログラミング教育・理科)

5月28日(木)にプログラミング教育と理科の校内授業研究会が行われました。事前に授業についての検討を研究グループで行い、当日の授業を行いました。

授業後は、全職員で授業者が示した「研究の観点」に沿って意見交換をして、今後の研究に活かせるように話し合いを深めました。

《プログラミング教育》



4年生の理科の学習の中で、「プログラミング的思考の5つの手順」を活用して問題解決を行いました。「電気のはたらき」の実験計画を立てる場面で、プログラミング的思考に関連した手順を使ってステップチャートにまとめることで、子供たちは実験の条件や意義を考えながら計画を立てることができました。



授業では、「どうすればもっと速くモーターを回すことができるのか?」という課題

に対して、子供たちは付箋に速くモーターを回すための数種類の回路図を描き、速さをどのように比較し検証するのかを考えながら順序立てて計画していきました。

このようにプログラミング的思考を高める学習を、各学年の教科・領域の授業の中で行っていく予定です。

《理科》



子供自らが解決の方法を発想する力を高めることができる手立てについて明らかにすることを目的に、5年生「植物の発芽と成長」で授業研究会を行いました。解決の方法を発想する力を身に付けている姿とは、調べるべき条件を発想したり、条件を変えるとどういった結果が得られるか予想したりすることと捉え、そのための手立てとして今回はロジックツリー図を基にした図による思考を試みました。

授業では、植物が成長するために必要な条件について、その条件がある場合とない場合について場合分けをして図をかき、それぞれ結果を予想していきました。かき始めはある程度かき方が決まっているため、子供たちは取り組みやすい様子でした。また、図に表すために自分の考えを整理しやすく、結果の予想をしやすくなった面がありました。一方で、より有機的に思考したりいくつか挙げた条件を制御したりする場面においては不十分な面も明らかになりました。今回の反省を生かし、より有効な手立てを明らかにすべく今後も実践研究を進めていきます。